

1993年6月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
(送料共)

編集／緑の地球ネットワーク
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739 (西552)
郵便振替 大阪4-128465
COM21 通巻311号 発行/COM企画室

緑の地球 **GREEN EARTH**

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- ネパールからのレポート……………P 3
- 黄土高原の基礎データ……………P 4



「黄金の夢」 撮影：倪雲翔（渾源県写真家協会理事）

1993・6

17

夏のワーキングツアー 黄土高原へ多彩な顔ぶれ

東川 貴子 (GEN世話人)

夏のワーキングツアーに参加するに当たって何か書くように、ということなのですが、出発までまだ1か月以上あるし、何も考えていなかったりするのです。とりあえず、ネパールからは緑化考察団の無事を知らせる絵はがきも届いたことだし、そしたらこっちも頑張らなかんな、と。

GENに対する私自身の基本姿勢はとにかく長く続けること、なので今回のワーキングツアーにはそれほど大きな気負いはありません。現地を一度自分の目で見ること。現地の人々の暮らしにふれ、短期間でも共に汗を流してくること。ひとことで言えば、とにかくいっぺん見てこようか、といったところでしょうか。でもそう何回も中国

を訪れるわけにもいきませんから、自分自身の体験を通して、今後の活動を支えるだけのものをしっかりとつかんでくるつもりです。

そろいつつあるメンバーの顔ぶれをながめると、夏休みで学生さんがほとんどだろうという予想に反して、さまざまな年代のかたがいらっしゃいます。17歳の高校生から62歳の大学の先生まで、関西各地はもとより、名古屋、東京、千葉、なんと新潟からも参加してくれます。現地での手配も着々と進みつつあります。滞在日数の都合もあり、訪問予定地はあくまで渾源県中心。西留郷や徐町郷、苗圃などでし

この素朴な笑顔にまた会える

っかり働いてくる予定です。移動に時間をとられることがないので、じっくり腰を据えた交流が期待できそうです。

7月29日の出発までのあいだに、2回ほど、参加者での打合せの機会を持つ予定になっています。緑化協力活動のほかにも、各地での観光や船上の過ごし方など出来るだけたくさんの意見を取り入れて、参加者みんなに意義の深い旅にしたいと思います。



運営カンパのお願い もう一段の飛躍のために！

緑の地球ネットワークは、1年の準備会を経て、この4月に正式発足しました。約350名の会員をはじめ、多くのみなさんのご協力で運営し、海外協力を続けています。

私たちのネットワークはまだまだ小さく、できることも限られていますが、多くのみなさんの参加で、すこしずつ活動を拡げていきたいと思います。

そこで、この時期みなさんに、夏期運営カンパへのご協力をお願いいたします。月1回発行の会報「緑の地球」をはじめ、国内の広報活動、交流活動等を充実させるための運営費がまだまだ不十分です。また、スタッフの専従費も徐々に保障していきたいと思っています。ぜひ、みなさんのご理解とご協力をお願いします。

夏期カンパ以外についても、可能なご協力をいただければ幸いです。

●夏期運営カンパ

金額はいくらでも結構です。

●会費（1口1年分）

一般会員	12,000円
家族会員 (家族の2人目から)	6,000円
学生会員(高校生以上)	3,000円
ジュニア会員(中学まで)	1,000円
団体会員	12,000円
賛助会員	100,000円

※会員の方は会費と別に会報購読料を支払っていただく必要はありません。

※ご都合のいいように分割払いしていただいてけっこうです。

●会報購読料

1年分(送料とも)	2,000円
-----------	--------

●緑化基金

金額はいくらでもけっこうです。1992年度は中国山西省渾源県に苗木代250万円の協力をし、1993年春には渾源県と桑干河青年森林プロジェクトに100万円の協力をしました。黄土高原の緑化のために引き続き募金活動を行います。ネパールについても調査と

協議がまとまった段階で、新しく協力を開始いたします。

自然と親しむ会

神戸市立森林植物園へ
7月4日(日)朝9時20分
三の宮そごうデパート東側
市バス25番のりば集合
参加費 500円(含保険料)



森林展示館で木や森の見方を学び、園内を歩いて世界の森林を見ます。針葉樹林、夏緑樹林、照葉樹林の中に入ってそのちがいをらべましょう。

【雨天の場合】開催中のあじさいまつりのあじさいガイドの案内で10数種類のあじさいを見てまわります。こちらも楽しみです。

小さな協力の大きな可能性 —ネパール・サーピン村から

東間 徹 (GEN世話人)



SARPING VIL

92.5.31

ムスタンへの出発を翌朝に控えたネパール緑化考察団から、カトマンズ周辺の活動を伝える長文のファックスとスケッチがはいりました。以下はその要旨です。

カトマンズに来て10日、雨期とは思えない天気に恵まれていましたが、昨日から本格的な雨になりました。雨のあととの日差しがまた猛烈で、身体中の水分を奪われそうです。それは西に行くほど、低地ほど激しいそうです。ボカラまでバスで8時間、そのあとジョムソンまでトレッキングですから、最初の4~5日が厳しい旅になりそうです。いま最後の装備の点検に余念がありません。元気で行ってきます。

話は前後しますが、5月30日から6月1日までサーピン村を訪ねました。地元の青年たちと佐野さんが貯水タンクを作っている村です。カトマンズからドーラルガットまで車で2時間、スンコシ河の吊り橋を渡ると、村への一本道です。標高600mの村の入口から1300mの村まで険しい登り道で、村の人

リ族の人たちで、名前もみんなギリさんです。佐野さんの数年来の友人でアメリカ留学中のウッドフ・ギリさんの家に泊めてもらいました。彼のところで、カトマンズでレストランのマネージャーをしているナワ・ギリさんが、案内と通訳をかけてくれたのです。

この村の暮らしは、収穫が順調なら一家が生活できるという点では、ネパールの平均よりちょっと上といったところです。急斜面に山頂近くまで作られたテラスフィールド（棚田）はまだ実をつけていないトウモロコシが茂ってみごとな景観です。収穫のあと、雨の多い年は水田にし、少ない年はミレットを植えるそうですが、今年は雨が少なく、村人は不安氣です。

この集落には水源が2つあります。1つは佐野さんが協力したもので、タンクから各家にパイプがつながり、主に炊事洗濯や家畜用に使われているようです。飲み水としてはもう1つの方がおいしくて、背負いカゴに水がめをいれた女の人が、日に何回も通っています。山腹の水場に竹の柵を差しただけの簡単なものが、涸れることはないそうです。しかし佐野さんによると水量が去年の半分だそうです。

気になるのは、樹木は村の周りにサラの木、マンゴウ、バナナなどがあるだけで、どの山もハゲ山に近いことです。豪雨による地滑りの跡がそこかしこに真っ赤な土を露出しているさまは不気味です。サーピン村はまだましまですが、耕作不能に陥っているところも少なくないようです。



サーピン村とテラスフィールド（棚田）

この村にも、青年はほとんどいません。クワをもつのはたいてい女性で、牛を使うのは男の仕事ですが、見たのは1人だけ。ナワさんはカトマンズの大学を出ましたが、村に仕事はありません。農業では食べられず、都市で収入を得たほうが家族にとってもいいのです。このままだと村は荒廃する一方で、ナワさんも同じことを感じています。村出身の若者がカトマンズのレストランで働きながら大学に通っていますが、なんとか村を再興する道がないか、彼らも模索しています。

佐野さんとの出会いはひとつのきっかけになりました。去年、貯水タンクは形だけだったのに、いまでは水道設備が整おうとしています。村出身の青年が資金を出し合って、屋根つきの村のトイレも作られました。

ナワさんも「仲間たちと村に帰れるようにしたい」と語りますが、それにはこの村独自の生産と消費のサイクルが必要です。燃料の節約と農作業の時間の削減を通じて、共同の村おこし事業ができるものか、そんなことが話されています。問題は市場とそこへのアクセスでしょう。村政府は革新色が強くプラン次第では6千人の人々に影響を与えることも夢ではありません。

小さな貯水タンクから、可能性が広がりそうな気がしています。



ウッダフ・ギリさんの家

は1時間で歩きますが、私たちは10回休憩して4時間かかりました。

人口6千人のサーピン村は9つの区からなり、私たちは第3区に属する15家族100人の小集落を訪ねました。ギ

黄土高原に緑を!

協力のための基礎データ(1)

「緑の地球」も新しい読者がふえ、黄土高原の緑化の基本的なことを知りたいという声があります。概略のデータをまとめてみました。(高見)

黄土高原はどういうところか?

黄土高原の面積は53~58万km²で日本に約1.5倍、標高1000~1500mの高原に6000万人の人びとが暮らしている。偏西風で運ばれた西方の砂が、太行山脈の西側に厚さ数10m以上も堆積したもので、その粒子は0.1~0.005mmと小さく、保水性に乏しく、アルカリ性が強い。

黄土高原は中国でもっとも早くから文明が開け、農業が発達したところで、平地はもちろん、丘陵も「耕して天に至る」段々畑が連なっている。遠景の山々にも最近植えたもののほかは樹木の影はみられない。

大昔の黄土高原は、「虎や狼から身を守るために密林を焼いた」というくらい豊かな森林に覆われ、気象も温暖で湿潤だった。それを破壊したのは人類の文明だった。増加する人口を養うため、都市や万里の長城造営のため、そして戦火のくりかえしが、森林を犠牲にした。人びとはその負の遺産の上に、自らも負を重ねながら生きてきたのだ。山西省の森林被覆率は50年代初めに2.4%まで低下していた。

激しい水土流失と沙漠化の危険

黄土高原の年間降水量は約400mmで日本の4分の1ほど、しかしその70%が夏に集中し、作物もろとも土壌を押し流し、深さ30m以上の垂直の裂け目をつくる。山西省雁北地区を横切る桑干河の水に1m³あたり平均44kgの砂が含まれるといえ、その深刻さがわかるというもの。土壌はしだいに劣化し、早晚、黄土高原は不毛の沙漠になるといわれる。(これらによる中国の耕地面積の減少は毎年0.5%に達するそうだ)。

水土流失の原因として見過ごせないのが、過耕作と過放牧。黄土は粒子が小さく、たがいに固く結合し、干乾し

レンガやヤオトン住居をつくるくらいだ。ところがいったん砕かれると、フカフカになり、風に飛び、水に流される。面積あたりの収量が少ないなか、増加する人口をまかなうため耕作面積がしだいに拡大し、かなりの急斜面も畑にされる。ヤギやヒツジの放牧によって、わずかな草も食われ、大地がむきだしになる。それがいっそうの水土流失を招くのだ。

はじまった森林再生の試み

この一帯の森林再生事業は1980年代後半から本格化し、かなりのスピードで緑を回復しつつある。

渾源県を例にとると、全県の面積は1960km²で大阪府よりちょっと広いが、1年の植林面積は平均3000ha(全県面積の1.5%)にたっする。植林適地6万5000haにたいして、93年春までに3万haを植林し、2000年までに5万3000haを終える予定である。

この県は三方を山に囲まれ、山地が53%、丘陵が28.4%、盆地が18.6%。それぞれの地形に応じて、つぎのような植林がなされている。

東部・南部は太行山脈・恒山山脈に属し、標高1200~2300m、ここではカラマツ(華北落葉松)を中心に、ネズ(杜松)、クモスギ(雲杉)、カバ(樺)などが植えられている。一帯の山を緑で覆うとともに、用材林としての期待がかかっている。

北部は黄土高原特有の丘陵地で、目の届くかぎりの斜面に段々畑が切り開かれ、侵食谷がそのあいだを切り刻んでいる。上のほうの荒れ地と畑を樹海にもどして保水性を高め、水土流失に

いくらかでもストップをかけようというのだ。ここで活躍しているのは内蒙古原産のショウジマツ(樟子松)とアンズ(仁用杏)である。ショウジマツは乾燥とアルカリ性に強く、しかもたいへんまっすぐなマツで、経済性も高い。アンズの核のなかの「杏仁」は、薬用、ジュースなどにつかわれるほか副食としても中国人の大好物である。



県の中央部から西に流れる渾河(桑干河の支流)の流域は海拔1000m前後の盆地で、農業にとってもっとも条件がいい。ここでは道路と水路の両側や家の周囲に網の目状にボプラやヤナギが植えられている。春先の「黄砂」は日本まで飛んでくるが、現地では「蒔いたタネが飛んでしまう」ほどで、これらの並木は風砂の害を防止し農業環境の改善に役立っている。

さらにここは、土壤水分や温度にも比較的恵まれており、リンゴ、ナシ、ブドウなど、果樹の栽培が試みられている。

経済性をともなった環境修復

自然条件の厳しい黄土高原は、中国でも指折りの経済困難地域である。さらにいえば、生態環境の破壊と経済的貧困の悪循環がつづいており、その悪循環を絶つ手段として植林に期待がかけられているのである。

雁北地区では、「水土保持」「国土緑化」のスローガンのなかに、「植樹百株十年后万元戸」「緑色銀行」といった表現がみられる。生態環境や農業環境の改善といった間接的効果のほかに、直接的な経済効果に期待がかけられているのである。それらの問題については次回につづけたい。(つづく)



元気で行ってらっしゃい！ ネパール緑化考察団を激励



もりあがったネパール考察団壮行会

ネパール緑化協力考察団の壮行会を5月26日、大阪市西成区のユニオンズハウスで開きました。35日間も歩きづめになる団員に、日本にいる間に精を

つけてもらおうと料理は豚足まで入ったユニオンズハウス風焼き肉。学生や20歳代の若者の団員が多いせいでしょうか。集まった25人では食べきれないと思っていた料理も、約3時間がかりで、ほぼさらえてしまい

ました。総工会というより、日本に残る人が、団員をエサにドンチャン騒いだ？格好でした。

と言っても、団員のネパールへの思

いは熱く、「援助ではなく協力を」「自分の位置を確かめてきたい」と意気込みを語っていました。

送る側も一人ひとり激励をしましたが、異口同音に言ったのが「体に気をつけて」と、「うらやましい」の二つ。

団員は今ごろ、ネパールの満天の星空の下で何をし、何を感じているのか。行けなかった我々に、貴重な体験を伝えてくれると思います。帰国報告が楽しみです。

最後に、この壮行会で、協力考察団へ5万円のカンパがあったことを付け加えておきます。（岡田光司）

息の長い協力活動を！ 黄土高原緑化協力団の報告会

5月19日の夕刻から、大阪市立港区民センターで「黄土高原緑化協力団」の報告会を開催しました。

中国での活動を記録したビデオを最初にみました。日本では想像もできない黄土高原の厳しい光景、そのなかに根をおろして生きる人びとの表情、そして持ち慣れないスコップをもって悪戦苦闘する団員のユーモラスな姿に笑い声があがって、滑り出しからうちとけた会になりました。

スケジュールの説明のあと、清田祐一郎団長が最初に報告しました。もし予備知識をもたずに行っていたら、一本もない光景にもっと衝撃をうけただろう、人びとの緑化にかける熱い期待と努力は理解できた、しかしあの自然環境のなかでの多様性の乏しい緑化に不安も感じた、数千年かけて破壊された自然なのだから何世代もの努力が必要とされるのは当然だろう、試行錯誤を系統づける研究者との協力が不可欠だと思う、という報告は全団員に共通する感想だったと思います。

川上四郎副団長は日本での営農指導の体験をもとに、表土が流され土がやせている、有機質をもっと土に返す必要がある、そうすれば保水性も高まるし塩基堆積を軽減することもできる、このままでは砂漠化が避けられないのではないか、と生態環境破壊と貧困との悪循環の現状を、率直に指摘しました。

団のメンバー8人の報告のあいまに

参加者からの質問や意見も活発に出され、森林再生のほかに石炭の燃焼にともなう煤煙や酸性雨の問題なども話題になりました。

いきなり飛び込んだ家庭の食事の質素さ、ジャガイモ・アワ・キビ・トウモロコシを主体にした現地食が糖尿病によかったこと（笑い）、人びとの表情、とくに子どもたちの目の輝きに感動したことなど、日本の私たちの生活を見直す契機ともなるものだったと思います。

報告会の参加者のなかから夏のワーキングツアーに参加したいという申込みが4人もありました。

この学科では3年生の春に研修旅行があり、去年、今年と北京→大同→渾源（懸空寺）の小旅行をしたそうで、そこでGENが緑化協力をしていると話したらビックリ。

国際協力も環境問題も、いまの学生にとってホットな話題、活発な質問があいつぎました。ここでも女子学生のほうがはるかに元気がいいそうで、授業終了後も数人が残って、現地の農村生活を中心に、小さなことまで熱心に遠慮なく食い下がってくれたのが印象的でした。

神奈川大学で 緑化協力を紹介

中国語を勉強している学生が多面的に中国を理解するためにGENが山西省でおこなっている緑化協力を紹介してほしいという話があり、6月10日、神奈川大学（横浜市）に高見世話人がでかけました。1、2年生を中心に参加者は80人ほど。現地の写真パネルを紙芝居のように使って、最初に1時間ほど話しました。

自然との共生めざして 自然と緑を守る大阪府民会議

自然と緑を守る大阪府民会議は、大阪総評を軸に全林野労働組合大阪地方本部、自治労大阪府本部が中心になって準備し、1980年11月16日に結成されました。その後は労働組合だけでなく、広く市民団体にも呼びかけてその参加をえてています。

発足当初は土砂採取による環境破壊への反対、「北生駒山系」の「緑化回復」、国定公園の充実など、行政に対する要請行動から取り組みました。

自然に対する府民の関心を高めることにも力点をおき、府の協力をえつつ、府民への「苗木」配りを行ったり、「自然保護の意識啓発」をしてきました。また将来にわたって自然環境



魚の手づかみ・歓声が緑陰にひびく

を守るには、子供たちに自然への関心を深めてもらうことが必要だと考え、夏休みに「子ども緑陰学級」（第1回は1985年、箕面公園）を開催していますが、これはたいへん好評で、いまでは府下3か所で毎年行い、さらに増やさざるをえない状態です。

「府民会議」は府下の自然を全て「原生林」として保護するのではな

く、可能なかぎり「里山」的な形で、府民が自然の中で集い遊べる空間を求めていました。山菜や果実等の山の幸の恵みを享受する楽しみを通じて、自然と「共生」することの大切さをこれからも訴えていきたいのです。

昨年は「サラワクの熱帯多雨林」の調査団を派遣するなど、活動領域も広くなり、それにみあう組織力を高めることが求められ、積極的に取り組んでいます。

（大東 弘）

【事務局】全林野大阪地方本部
大阪市中央区大手前4-1-14

サーカスがやってくる ベンボンズタ子ども共和国

みなさんご存じですか？『ベンボンズタ子ども共和国』。「強い者は下に、弱い者は上に、子どもは世界のてっぺんに」という世界の実現をめざしてスペインで作られた子どもの国です。その経済的自立を支え、自らの生き方を表現するのがこのサーカスです。

●8月21~29日 神戸ワールド記念ホールで公演。お問い合わせは大阪事務局☎06-376-3990まで

山西省の自然

石原忠一
(92年緑化協力団団長)

⑪渾河

北京の西郊に、月の名勝の盧溝橋があります。1937年演習中の日本兵の事故で武力衝突がおこり、侵略戦争の泥沼に入ってしまった歴史を忘れないために記念館がたてられました。

新旧の橋と列車の鉄橋のあるこのあたりは、水の涸れた荒廃たる川原が印象にのこります。

かつてこの河は、不定河と呼ばれ、含泥量が黄河に次いで多いので“小黄河”とか“渾河”的異名をもち、洪水を繰り返していました。清代に入ってから大堤防を築いて、流れの定まるところを願って“永定河”と改名しましたが、さっぱりききめがありません。解放後、太行山脈を横切る官庁峠にダムをつくって、ようやく安定させることができたのです。

この官庁ダムより上流を桑乾河と呼

び、長さ400km、その支流が恒山と六稜山の間の水を集めて西に流れる長さ100km、流域面積1,656km²（大阪府の面積1,880km²）の今の“渾河”です。

渾源県の苗圃へ車をはしらせながら、山側からのゆるい斜面に水のない凹地があって礫が目立つところを横切ったとき、ふと、10数年前、コロラド川とりオグランデ川の源流にホピ族の長老をたずねたときのことを想い出しました。そこはゆるい凹地で、あるかないかの草が地をおおい、地図には流れの消えた趾のような点線がひかれ、ウォッシュ（洗い流す）という記号がつ

けられていました。

オランダからのお雇い技師ヨハネス・デレーケ（1842-1913）は、平均年雨量1,800mmで流路の短い急勾配の日本の川をみて「これは河ではない、滝だ」といったと伝えられますが、私もがう水文圈にいることに気がつきました。

それでも孔子（B.C. 551-479）のことばはいきています。

“逝くものは斯くの如きか、昼夜を舍かず”



夏の大雨で河は暴れ竜に変わる



大阪キタの東通り商店街の一角にこじんまりした「居酒屋ほっぽう」がある。主人は北方ひろみさん。彼女の手料理と暖かい人柄に惹かれた常連客がひしめきあう店内に、GENのパネルとカンパ箱が置かれている。

「以前から、自然を大切にしなければ、私も自分のできることを何かしよう……とずっと思っていた」

という彼女。けれど仕事も忙しく、なかなか実際に行動に移せなかつたところに、たまたまGENのメンバーが客として店を訪れたのが、協力するきっかけとなった。

「自分で実際に中国に行って木を植えることはできなくても、代わりにしてくれる組織があるなら、私はここでできることをしよう。中国で1~2円

で苗木を1本買うことができるなら、みんなの財布の中に眠っている小銭を有効に使ってもらおう。そうやって、ここでカンパを集めることなら私にもできる」。

周囲の協力もあり、カンパは着実に集まってきた。

ところで、北方さんは仕事が、今まで多くの人に出会ってきたが、それぞれの出会いの不思議さ、素晴らしさにいつも感動し、人間というの何か役割をもって生かされているものだと感じるという。

そして、人間と自然との係わりについて、「人間と自然との共生は絶対不可欠であり、それに反するような生き方、ビジネスは、これからは立ち行かなくなると思う」とも。

さらに具体的に、ある建築家の例をあげてくれた。

「その人は1つ建物を作れば、必ずその中に緑を植える空間を作る。そし



北方ひろみさん

居酒屋ほっぽう経営。年に1度、絵の仲間たちと展覧会「北醉会」を開催。また文集「ほっぽう」を発行。

大阪市北区堂山町8-9 ☎ 06-315-0064

て、もし、人が亡くなったら、お墓を作るのではなく、木を1本植えようと提案している。そうなれば本当に素晴らしいじゃない」。

この店での出会いを通して、彼女の縁への思いは、徐々に周囲の人々に広がっているようだ。

(インタビュー 吉岡 幸恵)

たからだと思います。その秘訣を探ってみようとインタビューしました。通訳は林さん。

——中国雲南省で環境問題の雑誌の編集をしていたそうですが、中国の環境問題についてどう思いますか？

人口問題、大気や水の汚染、水土流失などがとてもひどい状況です。

——日本で何を学んでいますか？

中国の環境問題もありますが、世界中の環境問題を解決するために環境保全技術を学びたいと思います。

——日本でなにが印象的ですか？

日本は自由な社会で、技術も発展していると思います。そして自分が努力すれば自分の目的が実現できる可能性があることです。

——最後にGENにひとこと！

GENはいま生まれたばかりの赤ちゃんです。これからだんだん大きく成長して、影響力も大きくなって、日本中さらに世界に影響を与えてほしい。人類にとってGENの活動はたいへんな意義があると思います。GENは前途有望です。

——最後に希望あるメッセージをもらい、これから郭さんの前途も有望だと感じました。(磯川 佳子)



私もやりますよ！

地球相手の植木屋をめざす・清田直紀

2年間勤めていた会社をこの4月にやめて植木屋見習いとなりました。

勤めていたその会社は、中近東のある豊かな産油国で砂漠の緑化事業に参加していたのですが、採算がとれなくなり、3月で現地の事務所を閉鎖してしまいました。13年間続いたこのプロジェクトからの撤退は、「円高でもうからん」というのが理由でした。

その会社に入る前、私は青年海外協力隊員として、アフリカのザンビアで農業用水路を作っていました。2年間の任期を終え帰国、以前から砂漠緑化に興味があり、海外経験も生かせると思い、その会社を選んだのですが、結局、都会の砂漠、ビルの谷間で悶々とした日々を送り、プロジェクトからの撤退とともに、砂漠を見ることもなく辞表を出していました。

環境を勉強したい

郭艶春さんに聞く

ニイハオ！——とてもすてきな笑顔で再会した京大留学中の郭艶春さん。きっと郭さんの目が輝いていると感じ

日々是？？？――

大忙しのGENの事務所

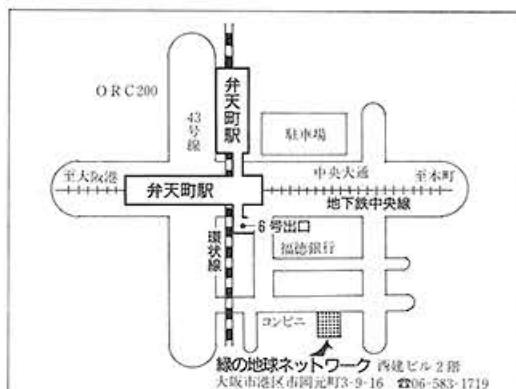
緑の地球ネットワーク(GEN)の正式発足から2か月、さまざまな方面からの反響があいつぎ、事務所もおおいそがしです。

4月のシンポジウムに前後して、毎日新聞、朝日新聞にGENの紹介記事が掲載されました。そのあと、5月の黄土高原緑化協力団に参加した朝日新聞編集委員・草陽一さんの記事がカラーワンページで載り、アサヒイブニングニュースにも紹介されました(日本滞在中のヨーロッパ人から連絡があり知りました)。またNHKラジオ第1放送のネットワーク日本でGENの紹介がありました。雑誌などの取材や原稿依頼もつづいています。

それらを見たり聞いたりした人から、詳しい活動内容を知りたい、資料を送ってくれ、という電話がたくさんかかります。それと、このところ多いのは自治体の国際交流部門、環境教育部門からの問い合わせで、市民の電話がそちらにかかるのだそうです。

また、会報の若い読者がひょっこり事務所を訪ねてくれることも多くなりました。このところ仕事に追いまくられていて、ついつい「ちょうどよかったです、手伝って!」ということになってしまって、ゆっくり話しあう時間がなくて申しわけありません。「緑の地球」のこの号でも、くるなり原稿を書かされた人もいたんですよ。

7月末からの黄土高原へのワーキングツアーハーは、参加申込みが20名の定員



に達し、はやばやと締め切りました。20歳前後の若い人が多いのと、東京、新潟、愛知など遠方からの参加があるのが今回の特徴です。

野生のさわやかさ“やまもも”

高知の田中隆一さんはミカン類を中心には有機栽培をつづけ、関西にもファンの多い人です。先日、ひょっこりとGENの事務所にあらわれ、まもなく南国土佐の珍果「やまもも(楊梅)」の出荷がはじまるとのことでした。野性味たっぷりのさわやかな甘酸っぱさは、そのまま食べても、果実酒にしても、つゆどきのエネルギー補給にぴったりです。



1箱 1kg (4パック) 3,000円

送料は関西のばあい 620円です。

【連絡先】田中隆一さん

電話 08872-9-2260

ファックス 08872-9-2500

売上げから緑の地球ネットワークへカンパしてくださいので、「GENの紹介」と一言そえてください。

私の本棚

イシ

—北米最後の野生インディアン
シオドーラ・クローバー著
行方昭夫訳
岩波書店同時代ライブラリー 1,200円

国際先住民年も半分を過ぎようしており、やや遅きに失した感がありますが、アメリカ先住民の歴史の一部を描いたこの本をご紹介します。

邦題のサブタイトルはいまいち好きになれないのですが、原題は「2つの世界のイシ」。カリフォルニアの先住民は、15~20万人が21の民族をなし、さらに250以上の部族に分かれていたといいます。イシはそのうちの一部族の最後の一人だったのです。イシ。推定生年1862年、没年1916年。最後のヤヒ族。

白人たちは先住民を恐れ憎み、時には復讐する。イシは1908年頃に最後の仲間を失いましたが、1911年、孤独に耐えきれず白人の町にさまよい出てきた時には殺されるものと覚悟していたのです。ところが意外にも白人社会に迎え入れられ、サンフランシスコの博物館で暮らすことになります。彼は名前を明かさなかったので、博物館の人類学者たちはヤヒ語で人間を意味するイシを彼の新しい呼び名としました。それから結核で死ぬまで5年間、イシは決して尊厳を失うことなく悠々と、人びとに愛されながら博物館で過ごしました。そして今なお、私たちに問いかけています。

人間とは、文化、文明とは何かと。
(東川貴子)

♡お便りをお待ちしています♡

今年も汗の季節がやってきました。みなさんいかがおすごですか。ただいまGENではみなさんのHOTなおたよりをお待ちしています。あなたの体験談や「このあいだ、だれそれからこんな話を聞いたよ」といった情報など、またはGENに対する疑問や意見、要望など、ありとあらゆることについてみなさんとお話ししたいと思っています。とにかく、考えるのはあと回しにして、紙とえんぴつを手にとってみてはいかがでしょうか!

編集部一同